

「若者の生活と意識に関する調査」

「生活と意識に関する世代比較調査」

研究会代表：浅野智彦（東京学芸大学・教授）

事務局長：辻 泉（中央大学・教授）

調査結果のお知らせ

青少年研究会（<http://jysg.jp/>）では、この 30 年ほどにわたって、若者の生活と意識、行動と価値観に関する調査研究をおこなってまいりました。1992 年より科学研究費によって10 年ごとに継続調査を実施しており、今回 2022 年 11月～2023年2月に実施した第四回調査の結果速報ができましたので、お知らせいたします。

1 調査概要

	①全国調査	②大都市調査（JYSG2012までと同様）
（1）調査対象 母集団	日本全国の男女 a.16-29歳／b.30-59歳	東京都杉並区、兵庫県神戸市灘区・東灘区の男女、a.16-29歳／b.30-59歳
（2）標本数	abともに2,400人	abともに2,400人
（3）抽出方法	住民基本台帳を用いた層化2段無作為抽出法（①②とも150地点）	
（4）調査時期	2022 年 11 月 14 日（月）～ 2023 年 2 月 20 日（月）	
（5）調査方法	調査員による訪問留置回収法（一部郵送法併用）	
（6）調査実施 委託機関	輿論科学協会	
（7）有効回答 数（率）	a.926人38.6% / b.968人 40.3%	a.635人26.5% / b.691人28.8%

※本研究は、2019～2023年度科学研究費基盤研究（A）「現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明」（研究代表者：浅野智彦、東京学芸大学教授）による成果の一部です。

※今回より、第三回目まで（JYSG2012、JYSG2002、JYSG1992）と同様の②大都市調査に加えて、①全国調査化を行いました。またメインとなる、a)若年層調査「若者の生活と意識に関する調査」に加えて、その世代を超えた広がりをつえようとするための、b)中年層調査「生活と意識に関する世代比較調査」を実施しました。

※以降、特段の断り書きのない場合を除いて、①全国調査のa)若年層調査を中心に結果を記していきます。

2 主だった知見： 過渡期の若者たちにみる再帰的ライフスタイル

全体的には①日本社会についての悲観的な意識や、社会より身の回りのことへの関心の高さ（以降の5の項目参照）がうかがえましたが、これをミーイズムの「私生活主義」や「現実逃避」と解釈するのは早計でしょう。なぜならば、②自己意識の不確かさ（同様に、6参照）もまた同時にうかがえ、今日の日本社会が、若者たちにとっては、社会についても自分についても確固たるよりどころが持ちにくい過渡期にあることがうかがえます。よりどころの持ちにくさでいえば、前回調査（JYSG2012）まで見られていた③友人数の増加傾向は減少に転じ（7参照）、④恋愛交際経験のない若者の割合は増加し続け（8参照）、またテレビなどのマスメディアよりも、スマホを介した⑤SNS利用など自分の関心に沿ったメディア利用行動が中心となってきています（9参照）。⑥音楽については費やす時間も金額も大きな変化はないものの、趣味全体ではかつて若者文化と
思われていたものが中年層にも広がっているのがわかりました（10参照）。

本研究会では、このように、社会についても自分についても確固たるよりどころが持ちにくい過渡期の時代において、若者たちが、それぞれのライフスタイルを自己反省的に見つめなおしながら、営んでいく状況を「再帰的ライフスタイル」と呼び表し、その実態をさらに今後も探求していく予定です。

3 今後の公表予定

- ①第96回日本社会学会（2023年10月8日～9日、立正大学、<https://jss-sociology.org/other/20230818post-14850/#d20>）
- ②学術出版（2024 年夏以降に予定）
- ③その他に、国際社会学会での学会報告などを予定

4 研究会の詳細情報

- ・ 青少年研究会（<http://jysg.jp/>）

- ・ 過去3回の調査の主な学術出版物

1992年調査（JYSG1992）：

高橋勇悦監修・川崎賢一・芳賀学・小川博司編

『都市青年の意識と行動―若者たちの東京・神戸90's（分析編）』恒星社厚生閣、1995 年
富田英典・藤村正之編

『みんなぼっちの世界：若者たちの東京・神戸90's（展開編）』恒星社厚生閣、1999年

2002年調査（JYSG2002）：

浅野智彦編

『検証・若者の変貌』勁草書房、2006 年

岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編著

『若者たちのコミュニケーション・サバイバル：親密さのゆくえ』恒星社厚生閣、2006年

2012年調査（JYSG2012）：

藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編

『現代若者の幸福：不安感社会を生きる』恒星社厚生閣、2016年

南田勝也・木島由晶・永井純一・小川博司編著

『音楽化社会の現在：統計データで読むポピュラー音楽』新曜社、2019年

- ・ 問い合わせ先：中央大学 辻 泉

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 中央大学文学部社会情報学専攻 辻 泉

メール：tsuji@tamacc.chuo-u.ac.jp

電話：042-674-3731

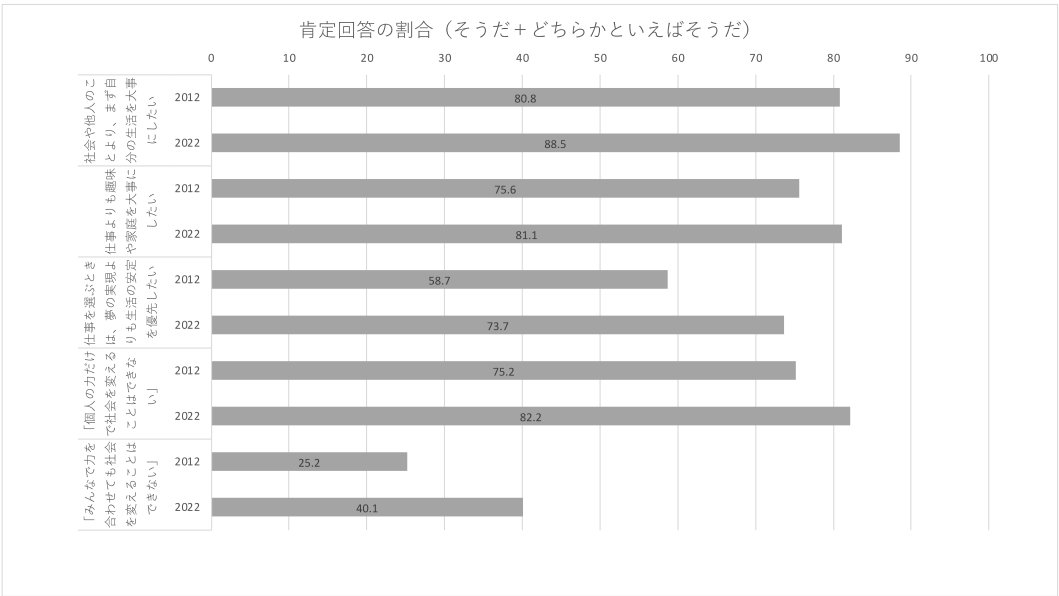
5. 社会意識の概況

文責：妹尾麻美（追手門学院大学）

●身近なことへの関心の高まり

▷研究会が実施した 2012 年調査(都市)と 2022 年調査(都市)を比較すると、「社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」「仕事よりも趣味や家族を大事にしたい」「仕事を選ぶときは、夢の実現よりも生活の安定を優先したい」への肯定回答が上昇している。加えて、「個人の力だけで社会を変えることはできない」「みんなで力を合わせても社会を変えることはできない」といった意見も強まっている。

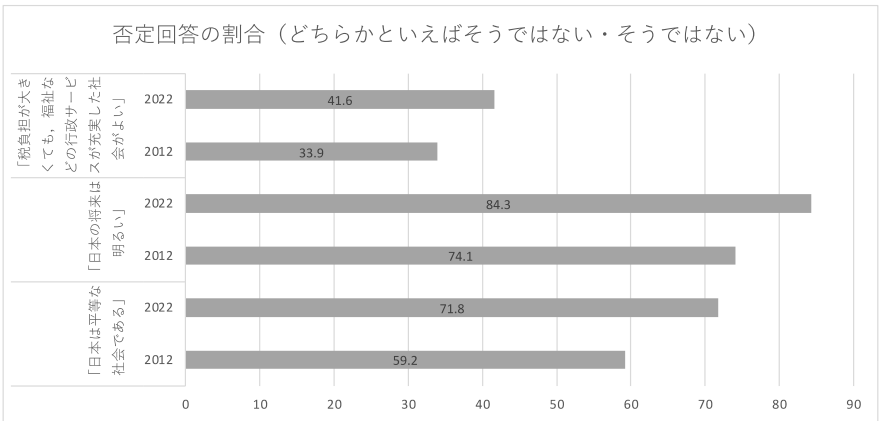
▷社会、他人、仕事よりも自らや自らに身近なこと（趣味や家族、生活の安定、現在性）を優先する志向の強まりが指摘できる。



●社会を志向する意識の弱まりや日本社会への悲観的な意識

▷10 年前と比較すると、「日本は平等な社会である」「日本の将来は明るい」「税負担が大きくても、福祉などの行政サービスが充実した社会がよい」は否定される傾向にある。

▷若者にとって、日本社会に対するペシミスティックな見方が強まったと示唆される。



●この 10 年の変化

▷「社会は変わらない」という前提のもと、個々人の身近なことに反応しながら生活していると見て取れよう。

6. 若者の自己意識の経年変化

文責：牧野智和（大妻女子大学）

● 自分のことはよく分からないし、他人と合わせている方が安心…でもそんな自分が好き

研究会が 10 年前に行った都市若者調査と比較すると、「今の自分が好き」「今のままの自分でもいいと思う」といった、自己肯定感に関する肯定回答率が統計的にみて有意に増加している。それと同時に、「自分がどんな人間かわからなくなる」「仲のよい友だちでも私のことをわかっていない」という項目の肯定回答率も増加している。一見矛盾するようにもみえるが、「意識して自分を使い分けている」「自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていると安心だ」という項目も増加していることを併せて考えると、結果として自分自身と仲のよい友だちの双方にとって、自分のことがよく分からないことになったとしても、周りに合わせて自分を使い分けられていること自体が肯定的に評価されているのではないだろうか。そうだとすれば、今日の若者にとっては、他人の存在が自己意識のなかでより大きなものになっているといえる。

	2012	2022
今の自分が好き	64.8	70.4
今のままの自分でもいいと思う	51.1	62.8
自分がどんな人間かわからなくなることがある	48.8	51.5
仲のよい友だちでも私のことをわかっていない	27.8	33.7
意識して自分を使い分けている	49.1	57.2
自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていると安心だ	34.9	45.8

● 「世間」を気にする若者たち

大切なことを決めるときに重視することについては、「自分の意見や信念」を挙げた割合が 10 年前と比べて低下し（2012 年 79.0%→2022 年 70.9%）、「世間の評価や道徳」（29.5%→37.8%）、「インターネット上で得られる情報」（28.3%→40.8%）がそれぞれ増加している。ここでも、誰かからの評価、世間の通念をより重視する今日の若者の傾向をみてとることができる。この「世間の評価や道徳」は、中高年の方がより気にしているように一見思われるが、若者調査と同時にを行った中高年調査（30～59 歳対象）での肯定回答率は 24.3%であった。

● 身体・アウトドア志向の趣味と自己肯定感

全国調査のデータを用いて、自己肯定感と趣味の関係について分析すると、自己肯定感に統計的に有意な正の関連をもつのは、相関係数の大きい順に「自分でやるスポーツ」「筋トレ・フィットネス」「キャンプ・釣り」「ファッション」となった。今日の若者においては、身体的もしくはアウトドア志向の趣味が、自分自身を肯定的に捉えることができる一つの資源として機能しているようである。

7. 多元化する友人関係の孤独

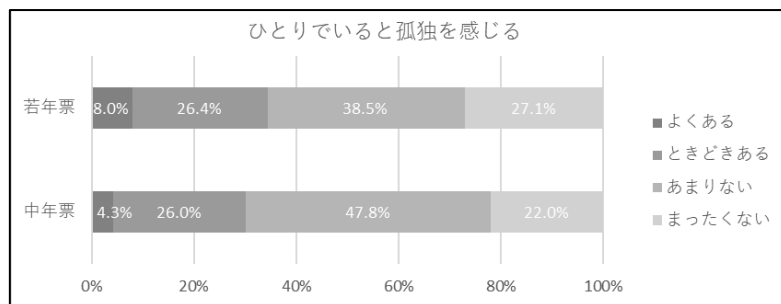
文責：小川豊武（日本大学）

●大人より友人数は多いけれど孤独

若年層の友人数の特徴について、中年層と比較をしてみよう。本調査で友人数を親密度によって「親友（恋人を除く）」「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」の3つに分けて尋ねている。これらの平均値を見ると、3つのすべてにおいて若年層の方が中年層よりも友人数が多く、ある程度、充実した友人関係をつくっているように見える。

	若年層			中年層		
	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値
親友（恋人を除く）の人数	0	40	3.4	0	50	2.4
仲のよい友だちの人数	0	200	12.7	0	200	8.4
知り合い程度の友だちの人数	0	1000	45.6	0	1000	30.3

その一方で、「ひとりでいると孤独を感じる」について、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」の4つの選択肢から1つを選ぶ質問では、若年層の方が中年層よりも孤独感を抱えている人の割合が高いことがわかる。若年層は中年層より友人数が多いにもかかわらず孤独を抱えているのである。



●友人関係の多元化と希薄化

2022 年調査では若年層の友人数は中年層よりも多かったが、本研究会が実施した 2012 年の若年層の平均値と比較すると、「親友（恋人を除く）」が 4.5 人から 3.4 人に、「仲のよい友だち」が 22.3 人から 12.7 人に、「知り合い程度の友だち」が 74.5 人から 45.6 人にと、3つの友人カテゴリーすべてにおいて減少している。

これとともに、「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている」に対する「そうだ」の割合が増加し、「友だちとの関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない」の割合は減少している。友人関係の多元化はひとつひとつのチャンネルにおける関係へのコミットメントの希薄化をもたらし、そのことが孤独感に結びついている可能性が考えられる。

		そうだ	そうではない
遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている	2022年	74.1%	25.9%
	2012年	70.3%	29.7%
友だちとの関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない	2022年	57.9%	42.1%
	2012年	51.5%	48.5%

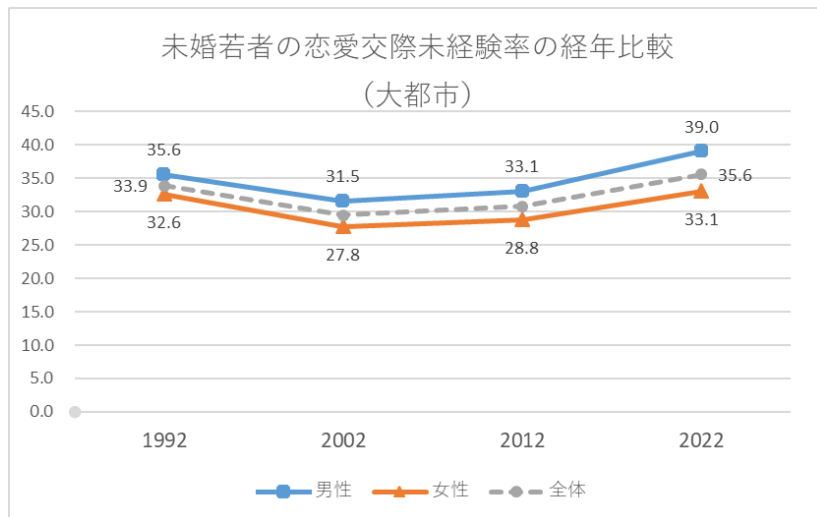
8. 若者の恋愛交際離れと恋愛疲れ

文責：久保田裕之（日本大学）

●恋愛交際を一度も経験したことがない若者の割合が増加

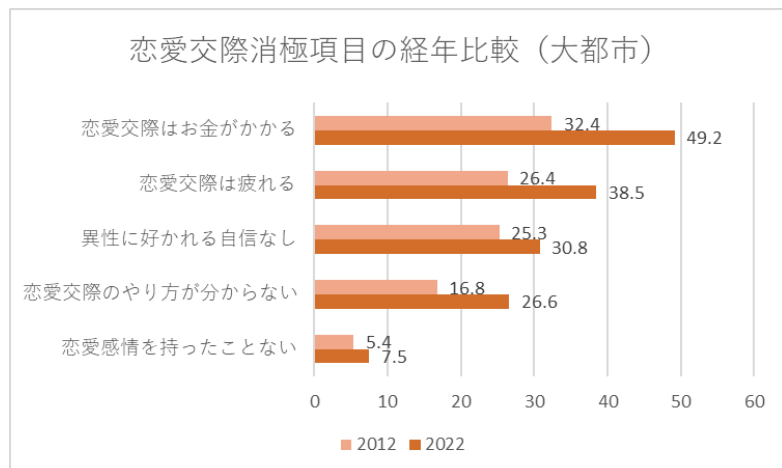
大都市における若者（未婚者のみ）の恋愛行動に関して 30 年間の変化を見てみると、恋愛交際を一度も経験したことがない若者の割合は、全体で見ると 1992 年 (33.9%) から 2002 年 (29.5%) にかけて減少したあと、2012 年 (30.8%) から増加に転じて、2022 年 (35.6%) では 1992 年の水準を上回っており、男女差も拡大しつつある。2020 年以降のコロナ禍において社交全体が抑制された効果も十分に考えられるが、2000 年代から問題化された若者の恋愛・性愛行動の不活発化のうち、大都市において現実の相手との「恋愛交際離れ」が進行してきた可能性があり、今後も注視していく必要がある。

加えて、全国調査データ（2022 年）と比較すると、未婚の若者の恋愛交際未経験率は全国で 37.8%（男性 42.7%、女性 33.7%）と特に男性で高く、大都市と比べて地方で暮らす若い未婚男性の恋愛交際経験の高さが、全国平均を引き上げている可能性がある。



●恋愛に対する消極的な態度の増大

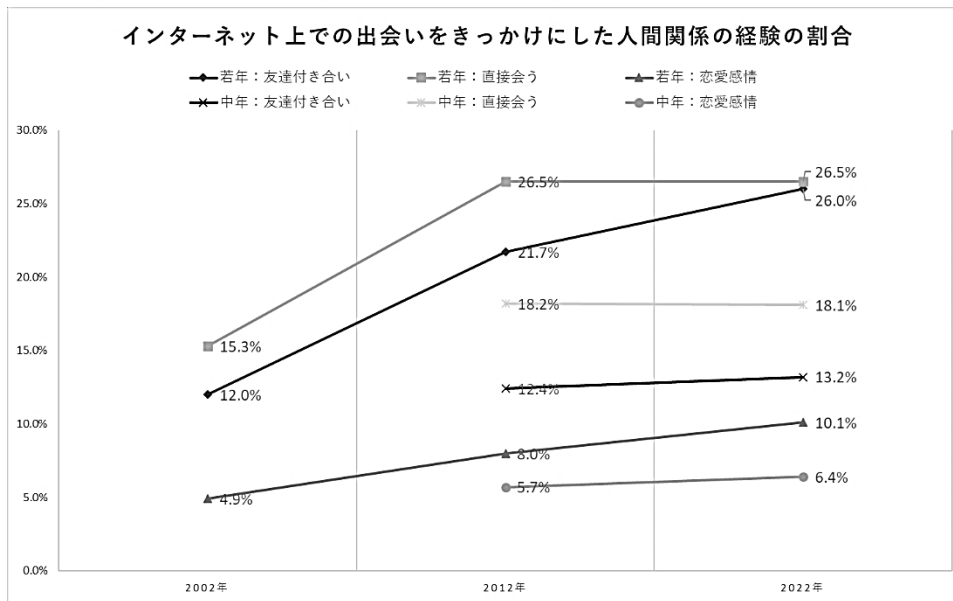
恋愛交際への消極化を検討するために、2012 年と 2022 年の大都市調査から比較可能な項目を見てみると、大都市の若者（未婚者のみ）の恋愛交際に対するコスト意識（お金がかかる・疲れる）は過去 10 年間で大きく上昇し、無効力感（やり方分からない・好かれる自信なし）も増大している。さらに、そもそも恋愛感情を持ったことがない層も少しずつ増加しており、こうした大都市の傾向は今後、全国に波及していく可能性もある。



9. 若者とメディアの関わり

文責：二方龍紀（常磐大学）

●インターネットを介した人間関係の拡大の「曲がり角」？



※「インターネットや携帯電話等（2012年調査では「インターネットやスマートフォン等」）で知り合った相手と友だち付き合いをしている」や「知り合った相手に恋愛感情を持ったことがある」の割合。
「直接会う」は、2002・2012年調査では、「知り合った相手と直接会ったことがある」で、2022年調査では「知り合った同じ趣味の人と直接会ったことがある」の割合

インターネットが本格的に若者の生活に普及し始めた2000年頃から比較をすると、インターネット上での活動をきっかけに親密な関係を広げる経験が全体として着実に増加している傾向が確認された。ただし、2002年から2012年の増加の幅に比べて、2012年から2022年の増加の幅は緩やかになっている。

●ショート動画視聴の流行とSNSの生活への浸透

10年前の調査時点と圧倒的に変化が見られたのはSNSをめぐる状況で、Instagram（2014年日本でのサービス開始）は、調査した4種のSNS（X（Twitter）・Facebook・Instagram・TikTok）の内最も多い73.5%の利用率となった（中年・全国でも同様に41.6%）。TikTok（2017年サービス開始）も37.5%となった。こうしたSNS等を使って視聴されるショート動画の利用率は53.3%に上り、「SNS上のショート動画を見始めると次から次に見続けてしまう」という回答は45.6%に上った。

SNSへの投稿は62.0%の若者が普段から行っていて、一般的な行動になっている。こうした投稿に伴って、写真の加工を行う若者も多く、「顔写真への加工アプリ」は25.3%、「景色の加工アプリ」は23.4%の若者が使用している。SNSを普段の生活から意識する傾向も見られ、「自分で何かをする時、SNS上での反応を気にする」という割合は20.2%だった。一方、「友人・知人の楽しそうな投稿を見ていると孤独を感じる」は14.1%、「SNS上で人から嫌な思いをさせられたことがある」も9.9%見られた。

●ゲーム利用の増加と身近になるメディア上のキャラクター

SNS以外のメディア接触としては、ゲームについても利用率が着実に増加している傾向が見られた（2012年と2022年の比較、若年22.4%→59.8%、中年15.9%→41.4%）。こうした傾向に伴い、「ゲームのキャラクターに思い入れを持つ」という若者も、2002年10.1%→2012年20.4%→2022年23.3%と増加し続けていて、身近に感じる若者が増えていることが分かる。

ゲーム以外のメディア上の人物への距離感が近い若者も一定数見られ、「テレビ・舞台・SNS・ネット配信などで見かける有名人に恋することがある」は7.6%、「生身の人間ではない、メディアや文学の中の登場人物に恋することがある」は6.8%となった。

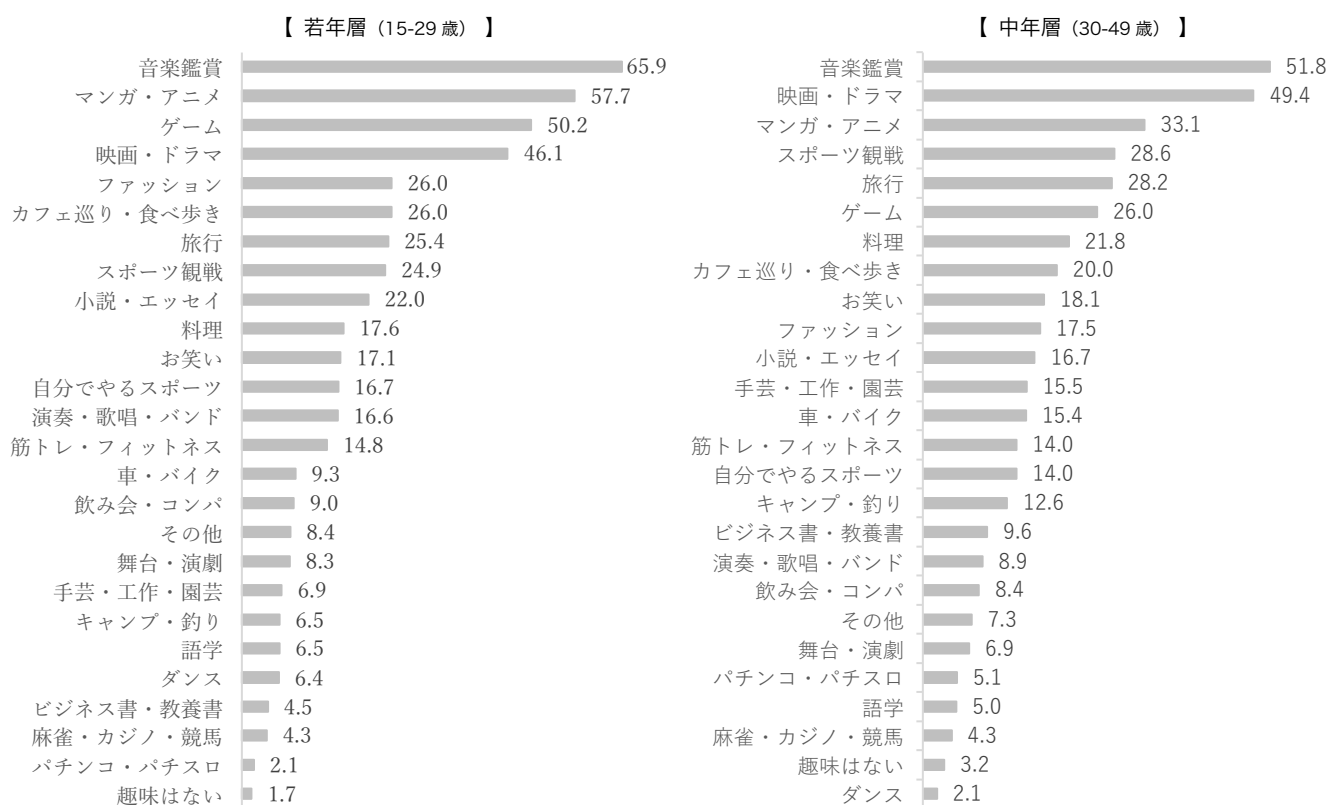
※2002年・2012年との比較は、大都市調査票の結果を比較した。その他の特に、表記のない文中の割合は、若年票・全国調査のもの。

10. 趣味と音楽

文責：木島由晶（桃山学院大学）

●「若者らしい趣味」が見えにくい時代

若年層と中年層で何を趣味と捉えているかを比べると、ともにアニメ・コミック・ゲーム（ACG）の高い割合が目立つ。スマホとネットとサブスクという情報環境がととのった結果、ACG の消費はもはやオタク系のマイナーな趣味ではなく、すっかりメジャーな趣味になったと言ってよさそうだ。若年層の半数以上がそれらを趣味と捉えているのに対し、中年層でそう捉えているのは3割前後と程度の差はあるものの（マンガ・アニメ：57.7%→33.1%、ゲーム：50.2%→26.0%）、趣味の上位をコンテンツの消費が占める今日では、「若者らしい趣味」というものもわからなくなっているのかもしれない。



●感情を管理するツールとしての音楽

都市部の若者の聴き方の変化を見ると、10 年前の 2012 年と比べ、2022 年の若者が音楽に費やすお金は月額平均で 300 円減り（1798.1 円→1513.2 円）、聴く時間は 1 日平均で3分増えた（88.7 分→91.6 分）。「自分の気持ちを変えるために音楽を聴く」への肯定回答（「そうだ」と「まあそうだ」の合算）の割合は4.0%減ったが（79.8%→75.8%）、積極肯定（「そうだ」のみ）の割合は5.5%増えており（42.1→47.6%）、若者は今なお、自分の感情を管理するツールとして音楽を聴く傾向が強いようだ。

●若者ほど「タイパ重視」って本当？

今の若者はタイパ（時間効率）を気にして行動しているという説がある。映画（動画）の倍速視聴が、その典型だが、音楽の場合はどうか。ギターソロのような間奏を飛ばす聴き方については、若年層で3.0%、中年層で0.9%しか「あてはまる」と回答しておらず、サビだけを聴くような「つまみ聴取」はめずらしい。また、アルバムの全体を通して音楽を聴く割合は、若年層の42.7%、中年層の44.1%が「そうだ」「まあそうだ」と回答しており、若者だけが楽曲単位で音楽を聴いているわけではない。だとすれば「若者ほどタイパを気にしている」という言説の妥当性はもっと疑ってよいのかもしれない。